

お話
NO.1

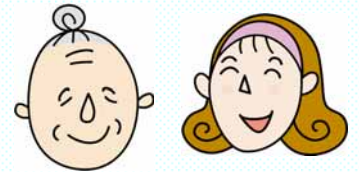
ふと、あの「夏」を想う (神奈川県 Oさん)

広島に赴任して間もない頃の休日のことであった。

夏の日が容赦なく降り注ぎ、クマゼミの鳴き声が公園の森そして街路樹から沸き起こっていた。私はこの日、赴任して初めて廣島の路面電車に乗っていた。宮島に向かっていたのだ。私は長距離の電車の旅も好きだが、町の中をゆったり走り行く路面電車の小さな旅も大好きである。そこには人間サイズのスピードのままに、町の風景が飾り気なく移ろい行く大画面の車窓がある。



路面電車は広島一番の繁華街、八丁堀、紙屋町を過ぎて大田川に架かる橋を音を立てながら渡りきっていた。幾つめの電停だったろうか、ふと見ると開いたドアの向こうから一人の老婦人が乗り込んでこようとしていた。しかし、上手く段差のある車内にあがってこられそうにもないのだ。そのときのことだった。妙齢のご婦人が座席から咄嗟に立ち上がるとその老婦人のところに降り、体を抱きかかえるように一緒になって車内に導き入れ、今まで自分の座っていた席をその老婦人に座らせた。そして少し離れた空席に自らは座ったのだ。瞬時のことだったが、私にとっては美しい御茶手前を見るような誠にすがすがしい光景だった。実にさりげない所作だった。言うまでもなく、この一事によってその日の私の小さな旅は特別な縁取りが与えられて、それこそ忘れ得ぬ思い出になろうとしている。



思えば、世は競ってバリアフリーを謳う。人が人を思う、助け合う、それが見も知らぬ他人であってもということ、とても大事なところだろう。「物」に支えられた便利さが加速度的に社会を変えていく今という時代。逆説的に場が薄れつつあると言われて久しい。しかし、人情に裏打ちされた庶民の生活は確実に存在している。東京の満員電車に揺られながら、ふとしたとき、あの夏の安芸の都で出会ったあの時の場面が美しい映画のシーンのように私の脳裏を去来する。